

湘南雜筆

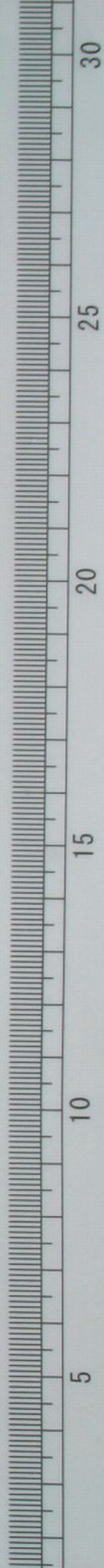
四五

特別

44

1919

75



〇華清池

支那宮の華清池とては、
つてそら、
どろろ、
るま、

東漢書

●驪山の温泉宮

驪山の温泉、唐の玄宗皇帝が楊貴妃と共に浴みし玉ひし處、長恨歌の所謂「春寒賜浴華清池」なるもの也。玄宗皇帝の西狩に類して、長安の古帝都に播遷したる光緒皇帝も回鑾の途、次同温泉に宿りし。旅路の疲れを醫し、させ玉へる由なり。雲外生なる者あり、偏く清國の内池を漫遊して、西安に至り、驪山の温泉に浴して、古今盛衰の事に感あり、詳に其の光景を報じて曰く、西安の東を距ると五十清里（我約五里）にして、臨潼縣城あり、縣城の南門外に驪山あり、其高さ約五百尺、秀翠受すべし、其麓に即ち温泉宮にして、唐代華清宮の遺趾なりと云ふ。臨潼縣城の南門を出て、南する十餘歩にして、門あり、額に題して、大地賜春と云ふ。又行くと七八十歩にして、影壁あり、其の左右に衛門の如きものあり、左折すれば、又一門あり、門の左右を房屋となす、右折すれば、車馬及び從者の房室あり、夫れより正面に進めば、更に門あり、乘馬乗車の容皆此の門にて下乗す、唯轎子の尙は門内に進むを得べし、門の左右に客房あり、其の正面を客堂とす、左折して小門を入れ、左に客堂あり、最も大なる客堂の正南に壁を設け、又小門を穿つ、小門

を入れ、則ち華清池なり、其の形稍、瓢に類し、而して之を内外に分つ、外池、塘に入浴せしめず、入浴せしむる内池、塘のみに限れり、内池、塘の濶さ一丈四五尺、長さ二丈三尺、深さ二尺六七寸にして、其の周圍及び底、石を以て之を圍む、池水の清徹なる池底の微物も皆之を見んとを得べし、水質、無味、臭に於て、温度九十度、内外なり、此の内池、塘迄を温泉宮の外部となし、其より後を宮の内部となす、小門を入り、右折して、石階を拾ふ、七八上に、殿屋あり、北面す之を正殿となす、左右に二三の廂あり、池塘上に設けたる神殿に連る、正殿の後方には、池塘あり、池塘中二閣を架す、其東方の一閣、全く池中に在りて、橋を架して、南北に通す、其の西方の閣、西側に於て、他の一廂に連る、是れ樓船の形に則れるなり、正殿と池塘との二閣との間、中の巨壺にして、雅趣、漸すべし、池塘の北方、一小門を隔てたる空地に、一殿堂と數廂、廂の新築せらる、あり、回鑾の際の行宮に充つるものなり、と云ふ、是れ現今驪山温泉の光景なり、其の規模、少にして、唐代華清宮の一小部分を存するに過ぎざらん、而も池あり、魚あり、亭あり、榭あり、樓あり、閣あり、其の配置、結構、孰れも雅致、風趣に富めるも、惜むべし

◎逐年紙譜

- 一 大寶元年 (河隆寺) 一 和銅 一 養老
- 一 天平七年 (山福寺) 一 天平勝寶 (天平寶字五年)
- 一 寶龜二年 一 延曆八年 (皇統義隆)
- 一 長寬 (砂子) 一 承安 (古宮海部) 一 承久元年 (宿紙)
- 一 弘安三年 (宿紙) 一 建武 一 梶原 (壬生官務)

◎古代布譜

- 一 古全禪 (大牡丹) 一 古錦綸 (白地) 一 船越南紙
- 一 二重菱 一 二重菱 一 銀 一 純 (妙壽)
- 一 建仁寺 (安王庵) 一 三葉菱 一 黃

紙譜

一 昔純金線

一 日一金

一 極西地

一 油地三程

一 大坂富錦

一 燒キレ程

一 魚 枳

一 蜀紅錦

一 錦二程

一 毛 織

一 今 古

一 金 副

一 フウツウ

一 唐 色

一 上印金

一 高麗印金

一 時代紗

一 紗粉程

一 竹尾町

一 唐純子

一 純子

一 唐東二程

一 紅毛四程

一 廿二廿

一 蝦夷錦

一 糖 靱

一 古袋何粉

一 法隆寺古緞布

一 古紋緞

一 同上 紗

一 古緞敷程

一 古緞帛敷程

一 古錦敷程

三つある下りかきし族長の勢力を堪ふことなれば
 めしすしきまゝにひきまゝに作らつた名を土着
 一之雄と稱せしと藤氏（藤原）も先ひま氏（藤原）なるべき
 源氏もまもあはせし以上の子孫平二氏の統
 るも結らま氏（藤原）と稱しさよふ源氏のみま
 摩腹とまひけとのひきまゝ、

○おはせしむけの平氏の系圖

高田のま氏の一族をさうつゝまひいゝまひだの
 系圖をさうつゝおはせしむけの統制なりこと

平氏系圖 前編

紙様原製

國香	貞盛	維將	維時	直方	北條氏
		維衡			伊勢氏
	繁盛	直忠	維茂		楳氏
良ゆ	ゆつ				
良直	分維	致軟	致経		長田氏
良文	忠通		貞通		三浦氏
			景成		大庭氏
			景通		梶原氏
	忠教	忠常	常伯		上徳氏
			伯常		千代氏
			朝常		高山氏
			朝尊		土肥氏

めす島の達者... 双方の果... 和義と云い出... 二人中... 決断... 氣吹...

○五段上と...

此の川... 晴み東... 七人... 東...

東...

城... の意... 際... 此... 倉... 合... ケ... 出... 米... を... ち...

海内... 一堆の土... 一海内を...

新風... 一海内を... 一海内を...

○海内... 一海内を...

海内... 一海内を... 一海内を...

東...

海内... 一海内を... 一海内を...

海内... 一海内を... 一海内を...

狹隘を感せしや又その寺院部を大舟六浦
小舟も溢れしなり

方中より人のあつた町を沿ひて三つ三つとある
お宿地を物取しつゝ都立十個ある大所前
米所並所助通橋大倉十番若大路下巻又
和歌山に及元住山(北地)の地(能)し(お)り
而してとせよの町を居る住書あつたし
えはわがら動すよん公の地を犯して家を
溝方のとうを捕へ換へ道返へ此をせし
新ふ路をひりきつゝあめ所なりな故印を
家をよんしことなる善し故に町人の

東林原製

申渡の浦保のみからの高家と云はれし
お

徳蔵の人数甚だ多し能く能く金持
ふまへ中酒壺甚多しおれりある一壺一壺
の酒を之を飲りしし人ありあるは酒を
民家の二壺三壺七壺十壺とありと云はれ
又二三の七のり何れある酒の酒数あり一壺一壺
に減りつゝの酒もあつた大抵一壺は約
二壺の酒にありしなり
萬の酒ありしなり
ハおれ三のりもありしなり

在考又と上とのすまきまの法四のゆ敷一左方の
人をもとに多しとが「（注）「イザ

火災の跡をもとにも次々二年の由に流るる出火し

と上より捕奪する燃え延び下り流るる（（注）「（注）」

と一畫たる回轉するも亦と流るる吉や路とて西

の傍々目谷まひ南と由に流るる北と中下馬

橋まをといふも此橋倉中のあり接流え湯の

此とあるをいふも此橋倉中のあり接流え湯の

積を中心とし七く流るる枝竹とら流せしむ

東橋長

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

此の橋倉中のあり接流え湯の

此の橋倉中のあり接流え湯の

此の橋倉中のあり接流え湯の

○海法

此の橋倉中のあり接流え湯の

此の橋倉中のあり接流え湯の

此の橋倉中のあり接流え湯の

をえんか二階をきまの谷の早走をく土居をいり
たき高柳をきまの谷をきまの谷をきまの谷を
也。元来青もあまのこちちあふ又と清宮に
一まの清宮にめの高さくあまの清宮に
ちまの清宮にめの高さくあまの清宮に
みれまの清宮にめの高さくあまの清宮に
あまの清宮にめの高さくあまの清宮に
清宮にめの高さくあまの清宮に
りけん怪もあまの清宮にめの高さくあまの清宮に
天下の清宮にめの高さくあまの清宮に
出まの清宮にめの高さくあまの清宮に

○ 境 飯

境飯とりをたのむ心年飯各歴代の宗無うして五回
風のまはらぬのたのむ心年飯各歴代の宗無うして五回
まの清宮にめの高さくあまの清宮に
一まの清宮にめの高さくあまの清宮に
ちまの清宮にめの高さくあまの清宮に
みれまの清宮にめの高さくあまの清宮に
あまの清宮にめの高さくあまの清宮に
清宮にめの高さくあまの清宮に
りけん怪もあまの清宮にめの高さくあまの清宮に
天下の清宮にめの高さくあまの清宮に
出まの清宮にめの高さくあまの清宮に

狩献納高野の地物とを従者大文田島三朝之
方いす此に固ききかくりとくまふし江戶の町家
うら投餉しし吃献と物さうし子

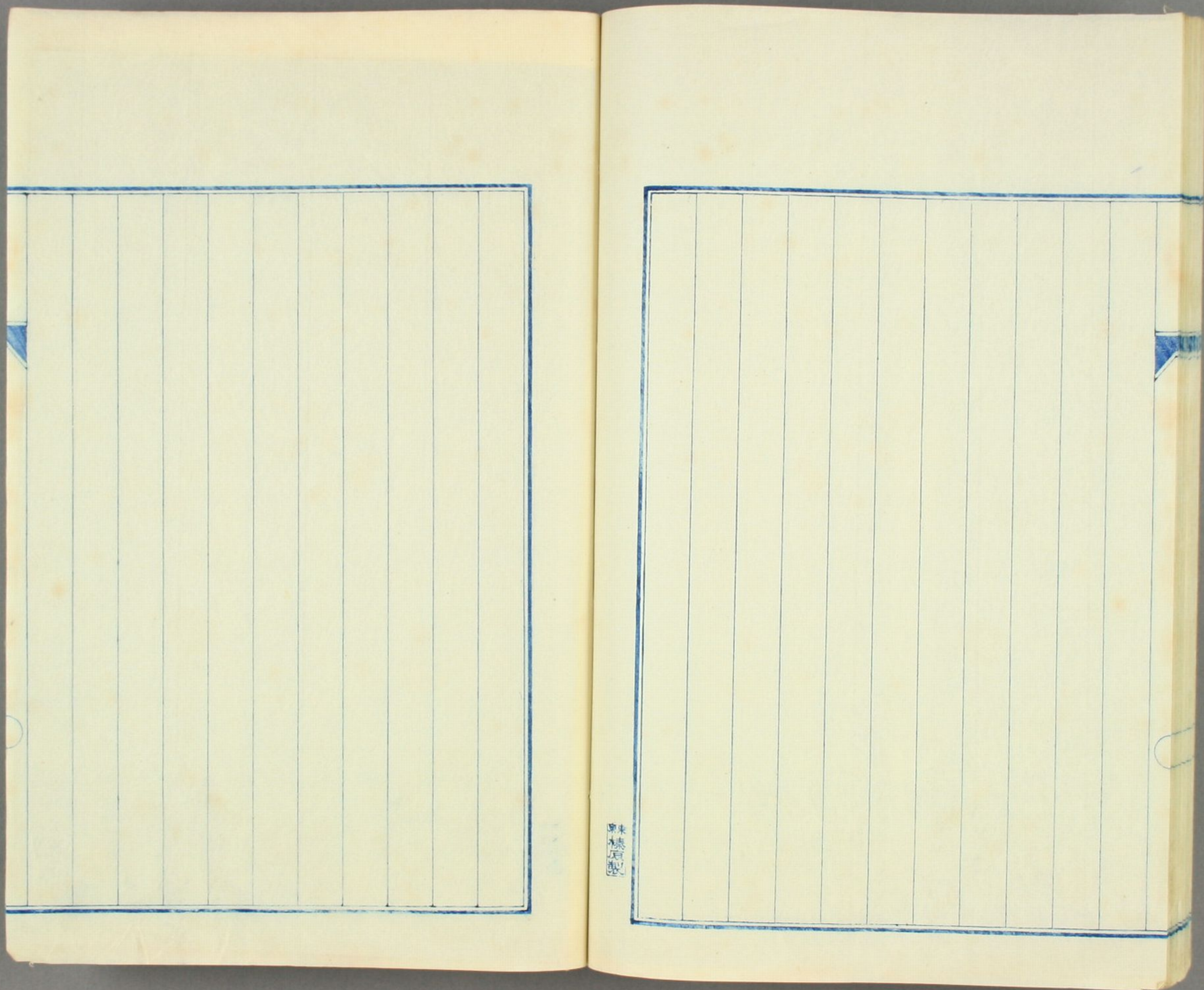
○申 狩

今投餉とすもの村の長を二方と名仰るる
狩節うしと儀志をばいすの御儀を思々くハ狩儀
お履も出でしものさうん流の申狩を能く之
とて認めぬのまは
小道也、流、滴、馬、大、追、物、牛、追、物、鷹、空、大
今是ん事人の狩めと流の申狩を能く之
今高七克とす狩場も坂車もすり天候

東林原製

ゆつた材をさす狩場とすゆめしものゆつ、即ち高
士伊王武さうし空外御狩いと天んうゆ力士を
着る味さの油餉物さうしゆしと故の狩儀
町は千秋末のさうしゆと何れも矢口餉、ゆつ夫
祭餉、是即ち大流の申狩を

矢日矢祭、其言同ト皆前功を祝ひ祭うと
餉と山室は献とすさうしゆし御年初の狩儀
ハ初所の獲物あふんを山室に献する餉をさ
初の初物さうしゆの初物を名あふんは叫ぶ
いずる所、其言同ト十言の狩と名つけし
十字とすものさうしゆとす、何れもすさうしゆ



興
林
原
製

以下全て
白紙

明
一
日
起
事

長
城
人